

## 【齋藤 美代子先生】

私は第2回から携わらせていただいています。1年空きましたが、今年で、第9回目になります。

最初のころに比べたら本当にレベルアップしてきています。

そこがやっぱり、“継続は力なり”ではないけれど、このブリランテコンクールの良いところではないかなあと思うんですけども。

課題曲については、各部門4曲くらい出ていますけれども、それぞれにやっぱり難易度が違うので、先生と相談しながら自分に合った課題曲を見つける事も重要じゃないかと思います。

合うものがなかった場合には、Bコースの自由曲で参加しても良いのではないのでしょうか。

例えば、ブルクミュラーひとつとっても、全音、音楽之友社、東音企画など様々な出版社が楽譜を出版しています。指導者の方も、生徒さんも1冊だけ手元にある楽譜だけを見るのではなく、少なくとも3冊くらいは別の出版社のものを立ち読みでもいいので、開いてみて、「ああ、こんな楽譜があるんだな」と。参考にされてください。

## 【實川 風先生】

皆様お疲れ様でした。

僕も今年で4回目になるかと思うんですけども、Bコースに関しては、すごく難しい曲を選んで見事に弾く子たちも出てきて、なんかレベルアップしてるなあ、と回を重ねるごとに思います。

どの部門にも共通して思ったのは、

バッハだと、右手と左手、両方共すごく大事だってことが分かっているので、左手も右手と同じようにきちんと表現を意識して弾かれる方がほとんどです。

ただ、左手が伴奏形になったワルツとか、ロマン派以降の曲の時に、右手の速い音符を「どういう風に歌おうか」「16分音符を全部弾こう」とかそういうところにはすごく意識がいつているんですけど、ウイナーワルツもショパンのワルツも「左手のワルツのリズム」を、ただ同じように刻むだけではなく、「メロディーの動き」とか「揺らぎ」に合わせて「左手のワルツのリズム」を伸縮させることが大切になってきます。特にショパンはそうしないと「ショパン」らしくならなかったりします。

ですから、僕は、左手の「ハーモニー」とか「リズム」の部分をもっと聞くようにしています。そこで色付けとか変化がつけられると、もっともっとお客さんも聴いていて楽しかったり、自分でも、練習の時にそれを発見していくことができると、とても楽しいんじゃないかなあと思います。ちょっと左手を意識して皆さんやってみてください。